

寄稿： 総合情報学部 西本 秀樹

●現在の心境

強がりではなく、恐怖心や悲しみは殆ど感じなかった。ただ、次に何をすべきかだけに意識を集中してきた。その緊張感だけは四ヶ月たった今もまったく緩もうとしない。

震災を神戸の中心地で体感して、社会人になろうとしている若い学生諸君に何を伝えればよいのだろうか。

●ふりかえれば

地響きと同時に2人の子供の布団に覆い被さり揺れがおさまるのを待った。轟音から飛行機の墜落事故だと思った。二次爆発の光景が頭を横切り、一刻も早く表に飛び出し、できるだけ家族を遠くに移動させる決断をした。暗闇と土壁の埃の舞う中で着れるだけの衣服を身に着ける。木造家屋の二階で寝ていた私たち四人家族は階下に駆け降りようとしたが階段は折れ曲がり、廊下を塞いでいる。しかたなく崩れかけたベランダ沿いに脱出する。落下しないよう何度も子供に注意しながら隣家のベランダへ移る。確かあったはずのブロック塀を探すため片足で空を切るとそこには土の感触があった。二階だと確信していた空間は一階部分が押し潰され地面の上の流れ落ちた格好になっていたのだ。

広域避難場所である小学校に向かう。がれきの下から聞こえるうめき声、救急車を求める叫び声。振り返りたくない。罪悪感。避難場所という言葉に希望をよせすぎている。正門を乗り越え運動場にはいる。何も無い。あまりの寒さのため校舎にはいることを考える。

しかしすべての入り口扉は施錠されピクリともしない。しかたなく花壇の植木鉢を掴み窓ガラスに叩きつける。右目に一瞬痛みが走る。この時右目瞼に入ったガラスの小片をまる四日間気づかなかった。

ぞくぞく集まる避難者。少しでも条件のよいところに布団を敷き縄張りを確保しようとする人、持ってきたパンを自慢げに口に押し込む家族。紙コップ三分の一の濁った水と子供一人半分の食パンが配給されたのはその日の夜中だった。トイレは昼前に使える状態ではなくなった。「午後三時三〇分に体育館も倒壊するほどの強い余震がくるので全員運動場にできるように」というデマが流れる。唯一の情報源であるラジオは電池切れ。

公衆電話には大変な行列が連なる。たいていは無音か「しばらくたってからお掛け直し下さい……」、百回に一度ほどの偶然の呼び出し音に賭ける。

家族の所在をだれかれなく訪ねる老人、子供の名前を叫びながら彷徨う女性の姿。

●社会への不信感

電話不通、交通遮断。

高度情報化をうたう通信網やコンピュータネットワーク、高出力エンジンを搭載し安全性を誇示する高級車、我々が理想とし、あこがれるモノとは、いざというとき助けを求めたり怪我人を運ぶこともできない、たかがこの程度だったのかと白けてしまう。

避難場所を離れ、新たな住居を探し、失った家財類をできるだけ速やかに復旧させ元通りの生活に少しでも近づけることは想像するよりはるかに大変な作業である。

役所や公的機関、銀行で働く個々の人々が如何に親身になってくれているとしても、組織としてみた場合、これからも自分の安全や生活を託する気にはならない。証明書類の発行や申請手続きの手際の悪さやたらい回しは落語の「ぜんざい公社」顔負けであった。「り災証明」を受け取るまでに役所窓口で五回、それぞれ半日ばかりで並び、さらに実際の発行は二ヶ月後であった。急場の融資を受けるのに束の書類の空白を埋め、証明書類をかき集め、果ては担保の提示や連帯保証人の所得証明まで持参した。実際に入金されたのは四ヶ月後のつい先日である。

●力を貯め強く生きる姿勢を

我々は自分の幸福度を他との比較ではかることが多い。

「あの地域に住まなくてよかった。」とか「うちは家は壊れてしまったけど家族全員無

事で怪我もせずよかった。」とか「怪我だけですんでよかった。」などと、もっと大変な目にあった周りの人と比べてそっと家中で囁きあい「よかった」を悪びれることなく連発する。

私は、これから社会に出ようとする学生諸君に、こんなちっぽけな幸福感ではなく、「自分はこう生きたい」「オレはこう考え目標に向かっていく」というような、いわば自分だけの絶対的幸福感を確立してほしい。

たまたま今回の震災のように多くの人々が一度に被害にあったがために社会的にクローズアップされたが、一生のうちには何度かどうしようもない苦難の壁や逆境が個人を待っている。

自分や自分の家族は自分で守るという毅然とした生き方、いざという時も自分を見失わない力と強さを身につけてほしいと思う。